

美術館館長とのつれづれなる談義【2015 年秋】

先日、大阪府枚方市にある公益財団法人天門美術館の山中信天翁(しんてんおう)展(平成27年10月6日から11月3日まで開催)へ行ってきました。

山中信天翁とは、どんな人物でしょうか。愛知県碧南市の出身。京都で活動。館長は、この人はもっと注目されるべきであると力説されていました。南画(画の中に書、つまり漢詩が記されているもの)の世界では第一級の人物のようです。政治家でもありました。

2015 年度秋季特別展

没後 130 年 山中信天翁展

今回は他に来館者がいなかったもので、館長と一緒に観賞しながらの立ち話になりました。その時の内容をお伝えします。

《爆買い》

中国人による爆買いは、美術品の世界でも起こっているそうです。

中国から日本にやって来て、美術商の「セリの世界」にも進出しています。セリに参加させることについて仲間内で反対意見があったものの、結局認められてセリで爆買いしていきます。

「美術の価値・評価」については、以前に記事にしました。

『美術って・・・』

<http://ameblo.jp/matsui-jicpa/entry-11648808798.html>

中国人が 20 万円でセリ落とした美術品が、中国において数千万円で転売されることもたまにあるとお聞きしました。決して数千万円の価値があると認識して、20 万円を払うわけではありません。十把一絡げの世界です。

言い換えれば、価値のないものに高値が付くのです。

中国人の爆買いによって、目利きのプライドがズタズタにされています。



《学芸員と画商》

日本では、学芸員が美術品を買うことはほとんどないそうです。それは、作品に執着することによって客観的に観られなくなることを嫌うからだとか。一方、欧米では、研究者は頻繁に美術品を買うのみならず、研究者が画商に転身したり、その逆が起こることはザラだそうです。

この違いはなぜ生まれるのでしょうか？

日本では、研究者(学芸員)と画商の仲が良くないことは事実のようです。

学芸員は画商のことを、鑑定眼がない、いやしいと一段下にみる。一方、画商は学芸員のことを、現場のことがわかっていない、実損を出して目利きの実学をしているのは自分たちだと批判する。

私は、日本の実情の方が理解しやすいです。

《幸せ》

モノやお金がたくさんあることが、幸せでしょうか。

豪邸に住み、欲しいものは何でも買えるようになりたいと、誰しも思います。しかし、「持っている人」は、財産が減りはしないかと気が気ではありません(想像です)。「持っていること」自体が心配の種を作ります。

館長のお知り合いで、食事代を自分で払ったことのない方がいるそうです。

この方は高価な美術品を多く相続したので、人が集まって来て、常に食事に誘われるのだそうです。

「飯代ぐらい自分で払いたい。」とは館長の言葉。

同感です。お金持ちでなくてもいい。心穏やかに暮らすことこそ幸せではないかと思えます。

いや、チョーお金持ちはともなれば、些細なことは気にならず心穏やかでいられるのでしょうか???

その他にも、館長と語り合いました。有意義なお話相手です。

また、お伺いするつもりです。